

## 国語科

# 確かな学力の育成を目指した学習評価の在り方Ⅱ

附属函館中学校 高橋 亜矢, 三津橋 ゆかり, 長谷川 美栄子

## I はじめに

本年度から、中学校でも新学習指導要領が全面実施となり、「言語活動の充実」や「思考力・判断力・表現力等の育成」等が改訂の柱として重視される中、これまでに増して「指導と評価の一体化」という言葉を見かけるようになった。いわゆる相対評価から絶対評価へと評価観が変化してきたこれまでの過程において、すでに「指導と評価の一体化」ということは盛んに言われてきたことである。「指導」と「評価」は表裏一体の関係にあり、教師側の視点から見れば「評価」とは指導目標や教材、学習活動などの「指導」を振り返り改善していくためのものであるということ、また、生徒側の視点から見れば、学習の過程において自身の学力を確かめ、次の学習への目標設定をするための基準や意欲づけとして働く機能を持っているということについて、昨年度の本校国語科紀要にも述べたとおりである。「学習評価」の在り方について考察を深めることは、「指導」の改善につながり、その結果として、生徒の確かな学力を育成することへとつながるものと考えられる。

今回の学習指導要領改訂に伴い、評価の観点も「思考・判断」が「思考・判断・表現」に、そして「技能・表現」が「技能」と改められたが、国語科については「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」という3領域に「思考・判断・表現」も「技能」も含まれており、言語活動そのものが学習内容にあたる国語科では、各領域の一連の活動の中で、「思考・判断・表現」と「技能」とを捉えていく必要がある。つまり、言語活動においては「思考・判断・表現」と「技能」とが一体的に表れていることを踏まえつつ、その活動のどのタイミングで何を見取るのかということをよく考え、指導を積み重ねていく必要があると考える。

そこで、今回の学習指導要領改訂によって示された「思考力・判断力・表現力」を見取るためには、評価の仕方をさらに工夫・改善していくことが必要であり、国語科の各領域の中でそれらをどのように見取っていくかということを中心に本稿で論じる。

## II 研究の過程

本校では学校研究として、平成23・24年度の国立教育政策研究所による学習評価に関する研究指定を受け、学校全体の取組として学習評価に重点を置いた研究を行ってきた。そこで国語科でも、学校研究を踏まえ、平成23年度から「学習評価」をテーマとした研究に取り組んできた。尚、この研究は本校国語科において平成20年度から22年度までの3年間に行ってきた言語活動に関する研究の延長線上の取組として位置づけるものである。

昨年度は、

学習内容を言語化させたものを積み重ね、評価と指導を繰り返すことで、「読むこと」の力を高めていくことができる。

という教科研究仮説に基づき、「思考力・判断力・表現力」を可視化させるために、思考のプロセスを言語化

させるためのワークシートの活用や定期試験における活用問題の工夫、口述試験などの評価方法を取り入れ、特に「読むこと」の領域を中心に研究を進めた。その成果としては、

①個々の生徒の学習過程をより細かく評価することや「思考力・判断力・表現力等」を一体的に評価することができ、生徒の「読むこと」の力を高めることにつながった。

②生徒自身に、学習の過程に目を向けさせることができ、他者との考え方の違いをより詳しくとらえたり、自身の学習過程の躓きを自覚させたりすることにつながった。

という2点があげられる。また、課題としては、

①「評価と指導を繰り返す」については、短期的な評価を積み重ねた長期的な見取りが必要不可欠であり、生徒一人一人の「読むこと」の力の継続的な分析と蓄積が必要である。

②「読むこと」以外の領域における「思考力・判断力・表現力等」の評価方法の工夫が必要である。

という2点が課題として残った。

そこで、昨年度の研究主題を継続させ、さらに深めていくために、評価の工夫により生徒がどのように変容したかという点を見取ることや、「読むこと」以外の領域における評価の方法を開発していくことが必要であると考えた。

### Ⅲ 本年度の研究

2カ年計画の研究2年目となる本年度はまとめの年にあたる。教科研究主題は昨年度から継続し、「確かな学力の育成を目指した学習評価の在り方Ⅱ」である。「確かな学力」については、昨年度の紀要に述べたとおりであり、学習指導要領総則に示される「生きる力」を育むための学力の3要素を指す。また、学習評価に関する研究指定校としての取り組みの2年目となる本年度の学校研究主題は「言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価についての組織的な取組」である。そこで、本年度の国語科研究においても、「確かな学力」のうち、特に「思考力・判断力・表現力」を中心とした「学習評価」の在り方について探っていく。

ただし、ここで述べる「思考力・判断力・表現力」の「表現」とは、北尾倫彦氏が「今回の改訂で思考・判断と一体的に評価されることになった表現については、とらえる視点をこれまでとは変えなければならない。これまでの表現は『正しく効果的に』といった、技能としての表現であった。この技能的側面は『技能』の観点から評価し、『思考・判断・表現』の表現としては内容的側面を評価することになったのである。」<sup>1)</sup>と述べているように、内容的側面を重視して見取るものとする。

まず、各領域においてどのような言語活動を行い、どのように評価するかということを研究の柱として取り組んだ。具体的には、評価規準を示した年間指導計画の整備である。思考力・判断力・表現力を一体的に捉えて学習評価を行い、生徒の指導に生かすということを意識し実践していく中で、指導目標と言語活動、教材との結びつきや評価規準が適切かどうかを実践し、振り返り・改善を繰り返した。

さらに、組織的な取組としては、国語科以外の教科等においても「言語活動の充実」が求められていることから、個々の生徒の国語の力を指導事項別に示して、他教科に発信することを試みた。これは、他教科で言語活動を組んだり学習評価を行ったりする上で、言語活動に関わる能力と他教科等で養うべき能力を明確に区別し、より適切な評価を行うことができるようにと考えたためである。

#### 1. 年間指導計画の整備・改善

昨年度から、評価規準を盛り込んだ年間指導計画の作成に取り組んでいる。年間指導計画は前年度末に立てるので、生徒の実態に応じて年度の途中で若干の修正を加えながら実践していく必要があるということに

については、平成22年度の本校紀要の中でも述べている。本年度は、昨年度のものをベースとしながらも、対象の生徒の実態が異なっていることや、教科書改訂による新教材の導入などもあり、各学年において教材等の入れ替えが必要であった。

また、評価規準についても、生徒の実態を踏まえた修正を加えながら、現在も整備・改善を進めている。信頼性の高い評価を行うためには、評価規準に照らして判断することは必要不可欠であるが、実践を経て更に練り直していくという作業も必要であろうと考える。更に、ワークシートや筆記試験の答案、作文などの学習成果物を蓄積していき評価の妥当性について検討を行うなどして、より信頼性の高い評価ができるよう取り組んでいる。

## 2. 各教科の表現力の測定・分析

各教科において「言語活動の充実」が図られるようになり、言語活動そのものが学習内容である国語科の役割は、さらに重要なものとなってきている。国語科以外の教科については、「言語活動」はあくまで目標達成のための手立てであり、言語活動そのものを評価することはない。しかし例えば、ワークシートの記述内容に不備がある場合、記述という言語活動に課題を抱えているのか、それとも学習内容の理解が不十分であるのかという点を見極める必要がある。また、他教科において話し合いやレポート作成などの言語活動を行う際、国語科の学習においてどのような観点でそれらの学習がなされ、どの程度達成されているのかという生徒の現状を把握しておくことで、より効果的な言語活動を組むことが可能となると考えた。

そこで、1学期の早い段階で、各領域の指導事項別に「A・B・C」の3段階で評価したものを一覧票にまとめ、他教科へ発信することを試みた。前年度の観点別評価に基づき、授業中の様子から見取った評価である。

【評価項目】														
話す・聞く			書く					読む				言葉のきまり		
話す	聞く	話し合い	課題設定・取材	構成	記述	推敲	交流	語句の意味の理解	文章の解釈	自分の考えの形成	情報活用・読書	漢字	語彙	文法

単に前年度の観点別評定を示すのではなく、上記のように指導事項別により細分化したことによって、例えば「書くこと」の領域がどのような観点から指導されているのかということ了他教科に示すことができた。また、他教科での生徒の様子を評価という観点から交流することで、教科内で身に付けた力が国語の授業以外の場面においてどのくらい発揮できているのか、あるいはどの部分が不十分であるのかという点をとらえることにつながり、個々の生徒の力を把握する視点を広げることができた。学習の主体である生徒を、各教科等を通して多面的に見てアプローチすることにより、個々の生徒の学力が総合的に育成されると考えている。今後、それぞれの項目について改めて分析し、国語または他教科でどのように培われていくのかを探っていきたい。

## IV 教科研究仮説

確かな学力の育成を目指した学習評価の在り方を追究するにあたって、研究2年目となる本年度は、以下の研究仮説を設定し、研究を進めることにした。

生徒の思考を言語化した記録を積み重ね、評価と指導を繰り返すことにより、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていくことができる。

「生徒の思考を言語化した記録」とは、ある課題に対して生徒が「思考・判断」した過程を含めて言語によって「表現」したワークシートやノート、発表、筆記試験や口述試験などのパフォーマンス全体を指す。また、「言語化」とは、やはり国語科である以上、話し言葉もしくは書き言葉として表出したものとおさえる。

## V 仮説に基づく実践と検証

### 1. 「話すこと・聞くこと」領域における思考力・判断力・表現力

#### ～定期試験における活用に関する問題と結果分析

本年度は、他領域における活用に関する問題の開発に取り組んだ。下の問題例は「話すこと・聞くこと」領域についての活用問題である。例えば、敬語を用いて会話を行う場合、「見る」の尊敬語は「ご覧になる」であり、謙譲語は「拝見する」であるということは言語に関する基礎知識であり、これを相手や場面に応じて正しく用いることが活用にあたる。そこで、記述させることによって、実際に話す動作に至るまでの言葉の選択という思考・判断のプロセスを見取ることができると考えた。

#### 【評価問題の実際】（第3学年）

次の文を正しい敬語表現に直しなさい。

(1) （担任の先生との会話で）校長先生はこの絵を拝見しましたか？

【評価規準】場の状況や相手との関係を踏まえて、敬語を適切に使うことができる。〔第3学年AⅠ〕

【正答の条件】謙譲語「拝見する」が誤りであることがわかり、尊敬語「ご覧になる」に訂正している。

【正答例】校長先生はこの絵をご覧になりましたか。／校長先生はこの絵を見られましたか。

この問題の正答率は62.3%であり、誤答例は以下のとおりである。

- ・校長先生はこの絵をご覧になりましたか。（二重敬語を用いている） 22.8%
- ・校長先生はこの絵を拝見されましたか。（謙譲語をそのまま用いている） 10.5%
- ・校長先生はこの絵をお目にかかりましたか。（「会う」の謙譲語「お目にかかる」の誤用、「見せる」の謙譲語「お見せする」の誤用） 3.5%
- ・校長先生はこの絵を見ましたか。（尊敬語・敬語表現に直していない） 0.9%

生徒の誤答を分析し、解説の中で取り上げて説明を加えることで、学習評価ふまえた指導を行うことができる。そこで、上記の誤答例から、二重敬語についての理解が不十分であると判断し、解説において他にも例をあげて説明した。また、1年次に「少年の日の思い出」という作品の中で「お目にかける」という慣用句を学習したが、この言葉を誤った意味や用法で用いていることから、この点も補足説明を加えた。重点を置く問題は授業時間内に取り上げ、それ以外の問題については模範解答などに解説を加えて印刷し、配布するという効果があると考えた。

### 2. 「書くこと」領域における思考力・判断力・表現力の学習評価 ～ワークシートの効果的な活用

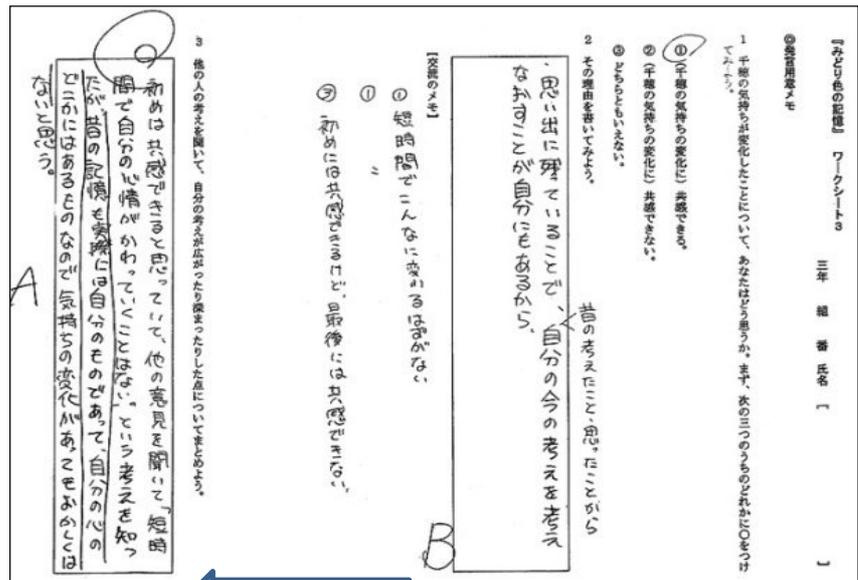
学習指導要領の国語科改訂の要点の一つに「学習過程の明確化」がある。例えば「書くこと」においては課題設定・取材、構成、記述、推敲、交流の5つの指導事項が順序立てて示され、「書くこと」の学習過程が明確にされている。そこで、ワークシートの工夫として、1つの課題を解決するための学習過程を明確に示し、各段階における生徒の思考・判断を書き残すことができるようにした。また、年間を通したワークシ





本年度はさらに、ワークシートやノートに交流前と交流後の考えをそれぞれ記入させることを意識して行った。その結果、交流後の生徒の記述内容に変化が生じていることが確かめられた。具体的には、自分と異なる意見を聞くことで、反論をふまえた意見に変わったり、質問されることで自分の意見の根拠のあいまいさに気付き補足したりしているなどの姿である。

また、「指導と評価の一体化」ということを意識して、A評価の生徒の考えを活字化して生徒に配付したり授業の中で発表させたりして、それらを参考に再び考えさせるということを繰り返したところ、徐々に生徒の記述内容に深まりがみられるようになってきた。



交流の前後で思考の深まりが見られた例

## 5. 仮説に基づく授業実践例と検証 ～俳句の鑑賞文を書こう「近代の俳句」(教育出版 3年)

本実践は、全 14 時間で計画した「読むこと」「書くこと」「書写」の各領域を関連させた複合的な単元の一部であり、単元の指導目標として、以下の目標を設定した。

効果的な語句の使い方や表現の工夫をとらえて自分のものの見方や考え方を深め、自分の解釈や感想をわかりやすく伝えるように表現することができる。

単元全体の指導計画については、年間指導計画を参照していただきたい。ここでは、「近代の俳句」の鑑賞文を書くという言語活動を中心に行った 3 時間目と 4 時間目の実践を紹介する。

3 時間目は〔C 読むこと 第 3 学年ア〕を本時の指導事項として設定し、俳句の鑑賞を行った。この 3 時間目を受けて、4 時間目では鑑賞文を記述・推敲する〔B 書くこと 第 3 学年ウ〕を指導目標として設定した。まとめとして、俳句の鑑賞文を書くという学習活動を設定することで、感想や考察を言葉にして表出させ、「思考力・判断力・表現力」と書く「技能」の一体的な見取りを図ることを試みた。

### 1) 学習の展開

題 材 「近代の俳句」

本時の目標

3 時間目 ○俳句の表現の豊かさに気付き、進んで味わおうとすることができる。

【国語への関心・意欲・態度】

○効果的な表現や語句に注意して情景や作者の思いをとらえることができる。【読むこと】

4 時間目 ○進んでよりわかりやすい文章を書こうとすることができる。【国語への関心・意欲・態度】

○効果的な表現や語句に注意して情景や作者の思いをとらえ、自分の想像を裏付ける箇所を適切に引用してわかりやすい文章を書くことができる。【書くこと】

	学習活動	教師のかかわりと留意点	評価
3	○本時の学習目標をとらえる。	○主な言語活動について説明し、本時の学習に見通しを持たせる。	※評価① ※評価②
	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">俳句を詠み味わい、情景や作者の思いを想像し、わかりやすい文章で相手に伝えよう。</div> ○春・夏の中から、自分の好きな俳句を選び、声に出して読み、ペアで聞き合う。 ○選んだ句の情景や作者の思い、表現の仕方など、ワークシートに箇条書きでまとめる。 ○ワークシートの内容を交流し、気づいたことなどをメモする。	○言葉のイメージや句切れなどを意識して読むよう指示する。 ○鑑賞する際の着眼点について具体的に取り上げて確認する。 【Cへの支援…机間指導しながら、口頭で想像を広げるための視点を助言。】 ○同じ句を選んだ生徒同士での交流をさせ、より深い思考を促す。	
4	○200字程度の鑑賞文を書く。  ○観点に基づき、自分の文章を赤で推敲する。 ○互いの鑑賞文を交流し、さらに推敲する。 ○推敲の観点を全体で交流する。	○ワークシートにまとめた内容を用いて、句中の語を適切に引用しながら書くように指示する。 【Cへの支援…参考文献を例示する】 ○内容面・記述面の両面から推敲させるようにする。 ○引用や表現の仕方、自分の思考や想像を表現する語彙などについて全体で交流し、わかりやすい文章を書くための工夫について振り返らせる。	※評価③ ※評価④

※評価①⇒音の響きや表現の工夫などを意識して読んでいるか（相互評価・机間指導）

※評価②⇒適切に引用し、わかりやすい文章が書けているか（ワークシート）

※評価③⇒進んで交流に参加し、互いの文章について考えを述べたり、メモと取ったりしているか（観察）

※評価④⇒自分の考えの根拠となる部分を適切に引用し、わかりやすい文章が書けているか（鑑賞文）

## 2) 実践を振り返って

3時間目に用いたワークシートは、まず、音読を行う場面における思考のプロセスとして、どのように読むのか、なぜそう読むのかという点をまとめさせ、その後のペア交流における観点を明確に持たせるように工夫した。また、自身の考えをまとめた後にグループ交流を行い、そこでさらに広がったり深まったりした考察をもう一度記入させることで、思考のプロセスの段階を明確にして書き残せるように工夫した。

4時間目のワークシートは、最初の文章を学習材料として活用し、自身の文章を振り返り（推敲）、他者の文章からさらなる工夫点を見つける（交流する）ことを通して、より良い文章を書くことができるよう意図した。また、この段階の文章に教師の評価を加え、次の学習活動へとつなげることで、最終稿へと作品を改善することを試みたものである。学習課題を解決する途中段階に適切に教師の評価を加えることで、より実質的な向上を促すことができ、さらに自分の文章に対して粘り強く取り組む姿勢につなげることができた。

国語科研究 編 著 氏名

俳句の鑑賞文を書く

俳句を味わい、情感や作者の思いを想像して、わかりやすい文章で鑑賞文を書く。

① 俳句鑑賞文

春風や開志いびやて丘になつ

② 鑑賞文の書き方

鑑賞文は十六大文字以内で書く。

春風やの春風の部分をやわらかく、開志の部分強く読む。

また、春風やで間をあげる。

③ 鑑賞文の書き方

鑑賞文を書くには、その句の情感や作者の思い、表現の工夫など、思いをたたくことが大切だ。

あたたか、やわらかい春風と力強くかたい感じのする開志の二つの言葉の連なり。

あたたかい春風が吹く中で開志といひなき、丘に一人だたずんぞいさ。

失敗してしまつたことがあつた。

次は絶対にもつてもうとうとう秀句だ。

強い開志

春レスタートの季節

④ 春風やわらわかい

春レ期待・希望

開志も力強い。

たつと立つし、何かと意味してゐるのではないか。

③に記述された自分の考えに付け足された④の交流後の気づき

が、4時間目の鑑賞文にも反映されている。

【3時間目のワークシート】

春風や

年 組 番 氏 名

な	未	立	か	及	こ	こ	志	に	に	や	ま	ま	ま	こ	て	と	か	る	に	に	や	
い	采	て	く	入	と	と	を	一	に	わ	れ	あ	あ	の	い	と	ら	力	一	に	わ	
か	対	む	む	の	こ	と	を	人	満	ら	な	な	な	句	る	と	こ	強	人	満	ら	
	す	む	む	目	の	と	を	立	ち	ら	ら	こ	こ	の	ら	と	を	い	ち	ち	ら	
	る	む	む	標	の	と	を	て	い	か	ら	ら	ら	中	ら	と	を	開	て	い	か	
	新	む	む	や	の	と	を	い	な	い	の	ら	ら	心	ら	と	を	志	る	力	春	
	だ	む	む	意	の	と	を	る	い	風	ぞ	ら	ら	は	ら	と	を	は	強	風	が	
	な	む	む	志	の	と	を	ら	る	吹	は	ら	ら	春	ら	と	を	ス	い	開	い	
	ま	む	む	し	中	の	と	ら	る	て	だ	ら	ら	の	ら	と	を	や	わ	ら	い	
	れ	む	む	未	心	の	と	ら	る	い	ら	ら	ら	暖	ら	と	を	切	ら	胸	に	
	が	む	む	采	は	中	の	ら	る	る	か	ら	ら	か	ら	と	を	れ	の	に	。	
	持	む	む	入	は	に	と	ら	る	い	か	ら	ら	く	ら	と	を	冬	の	に	。	
	て	む	む	運	作	に	と	ら	る	る	。	ら	ら	も	ら	と	を	の	季	の	に	。
	い	む	む	ば	者	切	と	ら	る	る	。	ら	ら	少	ら	と	を	あ	節	ど	に	。
	る	む	む	な	の	れ	と	ら	る	る	。	ら	ら	し	ら	と	を	り	あ	る	に	。
	の	む	む	あ	気	空	と	ら	る	る	。	ら	ら	春	ら	と	を	表	現	さ	ま	。
	ま	む	む	た	込	が	と	ら	る	る	。	ら	ら	風	ら	と	を	現	さ	ま	。	。
	ま	む	む	ま	あ	い	と	ら	る	る	。	ら	ら	に	ら	と	を	せ	ら	。	。	。

俳句の鑑賞文

一度目の記述に対する「B」評価とコメントを受けて、二度目の記述では、より考えが深まっている。

で感動の中は「風」のもの？  
この風をどのおりにうり切りたいか

本時の最終評価

【4時間目のワークシート（鑑賞文）】

思考の深まりを促すコメント

VI. 成果と課題

本年度の国語科研究は、教科研究仮説に基づき、指導と評価を適切な機会に適切な方法で繰り返すことにより「思考力・判断力・表現力」を高めていくことを目的としたものであった。

ワークシートの工夫や学習評価の生徒への返し方、指導へのつなげ方などをいろいろと工夫した結果、現時点では以下のような成果と課題が明らかになった。

【成果】

①「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のどの領域においても、「記述」させることにより思

考のプロセスの言語化が成立し、学習評価の材料として用いることができることが確かめられた。

- ②学習課題を解決する過程において、指導者による形成的評価を加えることにより、生徒の思考に広がりや深まりが生まれ、それを繰り返すことで「思考力・判断力・表現力」を高めることができた。
- ③生徒の言語活動を記録する手段として、タブレットPCを活用することにより、学習評価を適切に行うことができるとともに、データ化させることで容易に記録を積み重ねることが可能となり、さらに新たな教材として利用できるなど、様々な面で効果的であった。

#### 【課題】

- ①「思考力・判断力・表現力」の高まりを見取るため、また、生徒にもそれを自覚させるため、「言語化」ということを意識した結果、同様の言語活動における記述の内容を比較することが多くなってしまい、言語活動の内容に偏りが生じてしまった。国語科で培った「思考力・判断力・表現力」を様々な場面において活用できるようにするためには、言語活動そのものを工夫し、多様な活動を組んで評価していく必要がある。
- ②3年間の「学習評価」を積み重ねるためには、3年間を見通した年間指導計画の整備が必要であり、さらに評価時期や評価方法についても3人の国語科の教師が連携して行っていくことが必要である。

## Ⅶ. 終わりに

「指導と評価の一体化」を意識して実践を重ねていく中で、これまでの「学習評価の在り方」を見直すことができた。今後もより適切で妥当な評価を行うために、明確な評価規準を持って学習指導を行うことや、同じ国語科の教師や他教科の教師との連携を図ることの大切さを改めて実感した。今日の学校教育において「言語活動の充実」や「思考力・判断力・表現力等の育成」ということが求められていることから、国語科として何をどのように指導し評価するのかということを常に考えながら、今後も研究を進めていきたい。

(文責 高橋 亜矢)

#### 〈引用文献〉

- 1) 北尾倫彦(監修)山森光陽・鈴木秀幸(全体編集)金子守(教科編集)(2012)『観点別学習状況の評価規準と判定基準 [中学校国語]』14項

#### 〈参考文献〉

- ・文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2011年7月)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 国語)』
- ・日本国語教育学会(編)(2012)『月刊国語教育研究 No.479』第47巻3月号
- ・文部科学省教育課程課(編)(2012)『中等教育資料 No.913』第61巻5月号
- ・北海道教育大学附属函館中学校(2011)『教育研究大会研究紀要』